

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Tungusic Languages in Russia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 風間, 伸次郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001916

ロシアのツングース諸語

風間 伸次郎

1 概況——分布と話者人口

2 ツングース諸語をとりまく状況とその文化

1 概況——分布と話者人口

エウエンキー語、エウエン語というのは北方に大きな分布を示すツングース諸語の二つのグループで、これは後の時代になってから広がったものと考えられている。

地理的分布の上で、エウエンとエウエンキーの間がはっきりあいていることがわかるが、ここはヤクートの住んでいるところである。ヤクートは、30万人以上の人口を抱えていて、シベリアではもっとも巨大な言語であり、この地域ではむしろロシア語を凌いでシベリアの共通語になりつつある力を示している言語である。これがレナ川沿いに分布しているので、エウエンとエウエンキーの分布はこれに分断されている。ロシア領のツングース諸語の残りの言語はほとんど沿海州とハバロフスク州、及びサハリンに集中している。すなわち日本海を挟んで日本の対岸にあるということになる。

地図において、4番のネギダル語は拡大図の上の方に二つだけある。これはエウエン語及びエウエンキー語に系統的に近い言語である。5番ウデヘ語は、シホテアリン山中に住んでいる狩猟民族である。6番はオロチ語で、これは主に日本海側に注ぐトゥムニン川に沿って分布していて海獣狩猟を行っていた。しかし現在ではこうした本来の伝統的な生業は失われている。

この5番と6番、すなわちウデヘとオロチは互いに系統的に近い関係にある。池上二良氏の分類によるⅡ群というグループである。

7番がナーナイ語でアムール川中流域に分布している。それと非常に近い関係にあるのがアムール川下流域にあるウルチャ語で、8番である。8番はかなりかたまった分布になっていることがわかる。このウルチャ語とまた近い関係にあるのがウイルタ語で、池上二良氏によって長年研究されてきたが、これはサハリンに分布している。9番である。3番のソロン語は中国領のツングース語ということになるので、津曲氏の発表を参照されたい。0番の満州語（シベ語を含む）も中国領のツングース語ということになる。よって地図上での1, 2, 4, 5, 6, 7, 8, 9番がロシア領のツングース語というこ

とになる。発表者は1番と9番には、ほとんどわずかにしか触れたことがないが、他の言語にはある程度の実地調査を行ってきた。

次に人口についてみる。一番新しい1989年の統計でエウエンキーは30,000人、話者人口は9,000人である。次のエウエンが17,000人で7,463人。発表者は2000年春にギジガというエウエンの奥地の村まで行ってみたが、エウエン語の保存状況はかなり良好な状況であった。30代40代にも話者がいる。特にトナカイ・ブリガードという、トナカイ放牧を行なっているグループは、中央から遠く不便なところに住んでいるので、かえってロシア語の影響から隔離され、エウエン語をよく話している。発表者が訪れたギジガ村でも十分にその活力は感じられた。しかし民話等の口承文芸を保持している者は、やはり50代、60代である。

ネギダルは人口800人で話者170人である。10年後の現在、おそらくその話者は半分以下で100人に満たないものと考えられる。ネギダルが居住しているのは、ポリナオシベンコ村とトゥイル村、ベログリンカ村、カリマ村、マゴ村である。発表者はこのうち後者の4ヶ所には行ったことがある。発表者が会うことのできた限りでは、ネギダルは20人に満たなかった。話者はもっとも若い者でも60歳ぐらいであろうと考えられる。

ウデヘは人口2,000人で話者526人という統計となっているが、発表者の感じでは、これは全く多過ぎる見積もりではないかと考えられる。ウデヘのいる村も4ヶ所で、グヴァシュギ、クラスヌイ・ヤール、アグズ、それからアルセイニェヴァである。発表者はこのうち、アルセイニェヴァを除く三つの村に行ったことがある。現時点でその話者人口は4ヶ所全部あわせて500（1989年）となっているが、発表者にはもっとずっと少なく感じられた。

オロチは人口900人で話者169人となっているが、これがウイルタ、ネギダルに次いで、もしくはネギダルより悪い状況にある。したがってツングース諸語の中では二番目に悪い状況にある言語だということになる。169人ということだが、これは現在では100名を割っている可能性がある。

オロチのいる村はウスチ・オロチスカヤ、ダータ、などであり、この二つの村を発表者は訪れたことがある。どの村もその人口は数百人と小さく、しかもどの村もロシア人が多数を占める村となっている。

ナーナイは人口12,000で話者人口5,000人位ということになっている。ナーナイの住む村はかなりたくさんあって、しかもかなり僻地にもある。そのため発表者もそのいくつかしか訪れたことはない。したがって上記の数字にどれぐらい正当性があるかは実感として語ることができない。ナーナイは発表者が一番長く取り組んできた言語であり、自分がふだん行っている村の範囲内で感じたこの言語の活力について触れておく。やはりその話し手は、ソ連邦成立以前に教育を受けた人々である。おおざっぱに言って、ロシ

アの少数民族にとってはその1930年代というのが大きな境である。つまり現在60代から70代以上の人はよくその言語を話すが、それより若くなるとそれとはかなり大きな違いがある。50代、40代の人々は、ナーナイの場合ナーナイ語ができないことはないが、あまり話したがない。30代以下は、ほとんど全く話さない傾向にある。ナーナイの居住地は、上述のエウエンなどと比べて、僻地とはいってもハバロフスクなどの大都市に近いので、その点からもその衰退はより早いと考えられる。

次にオルチャであるが、オルチャは人口3,200人で、その中の話者は986人となっているが、この数字は実際より若干少ないかもしれない。オルチャは地図を見るとわかるが、その分布が非常にかたまつた分布になっている。つまりオルチャの住む村は互いにかなり近接してあっており、しかもそこに行くには、ハバロフスクやコムソモリスクといった大きな都市からかなり下流に行かなければならない。発表者は'93, '94年にわたって3度ほどオルチャの村を訪れたが、その言語の保存状況は割合に良好であった。以上でその分布と人口についての概説を終る。

現在までのこれらの言語の先行研究については、言語学大辞典のそれぞれの言語の項目を参照されたい。最近の日本での研究については、章末の「ツングース言語文化論集」の既刊目録も参照されたい。そこにあがっているテキストには、キリル文字ベースの正書法で書いたものが必ずつけられていて、現地の人にも読めるようになっている。要旨に関しては、最近刊行のものには英訳やロシア語訳もつけるように留意しており、現地への成果の還元を目指している。発表者は録音したテープについて、必ずコピーを現地に送るようにしている。

2 ツングース諸語をとりまく状況とその文化

以下では写真によりツングース諸言語の文化的背景を紹介する。その順序は、エウエン、ネギダル、オロチ、ウデヘ、ナーナイの順で行なう。



写真1

エウエン語を調査する際に最初が入るのがマガダンという街である。ハバロフスクから2時間ぐらい飛行機で飛んだところにある人口約10万人の街で、ロシア人がたくさん住んでいるが、エウエン人もわずかに住んでいる。かつてはロシアの流刑地だったところで、日本人の捕虜でこの街の建設に従事した方も多い。



写真2

マガダンは海に面しているので、海があるが、冬は全部凍ってしまう。北緯60度ぐらいであるが、海に面しているので、それほど気温は下がらない。内陸部ではマイナス30度ぐらいまでは下がる。夏でも山には雪がついている。



写真3

発表者のコンサルタントであるエウエンの方の一人は元学校の校長先生で非常に真面目な方である。エウエンの文化や言語、文字に深い関心があり、自身が積極的にエウエン語の書き起こし、保存に取り組んでいる。発表者が今まで会った中でも最も積極的な協力者で、2001年の1月から2月にかけては日本に招聘し、協力を頂いた。エウエンの衣装の様子は、南の方のツングースのものとは異なっている。南の地域の模様はアイヌとも共通するアムール流域のものであり、渦巻き模様が多い。

エウエンでは、歌というものは個人的な色彩が強く、また、自分の個人的な体験を歌ったような即興的なものが多く、しかも個人的所有物で他人が歌ってはいけないとされている。その解釈は非常に難しく、発表者もある時のフィールドワークでその期間中をほとんどこれらの分析に費やしたことがあるが、それでもなお十分な分析はできなかった。解釈が難しいのは、古い要素を含んでいるためかもしれない。ちなみに発表者はエウエンの調査には96年夏、97年夏、99年夏、2000年春、2000年夏、2001年春、2002年夏、と今まで7回行っている

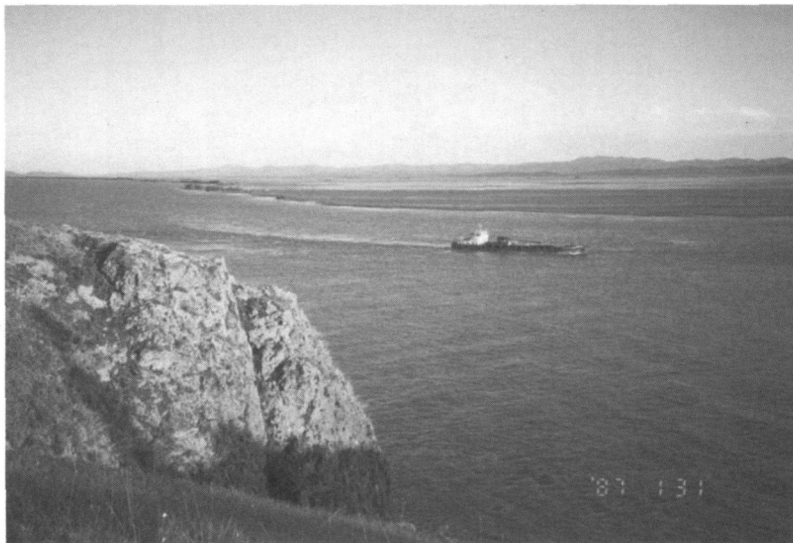


写真4

ネギダルの分布地域はアムール河のもっとも下流に位置する。ここではアムゲン河という大きな河がアムール河に合流している。アムール河は非常に深く狭くなっているが、いったん氾濫すると山の方まで川が溢れるそうだ。これはトゥイルという村から見たアムールで、かつてはこの高台に女真語で書かれた碑文があった。



写真5



写真6

これはトゥイルの村からモーターボートで1時間ほど行ったところにあるカリマという村で、ネギダルも住んでいるが、その住民の多くはギリヤークである。村の110人ぐらいの人口のうち、100人近くがギリヤークであり、もしギリヤーク語を研究するのであれば、非常によい環境である。泊めていただいた家の家族全員がギリヤークであったが、父親がロシア人であったので、子供は外見からはロシア人のようであった。小学校の先生にはギリヤーク語を教えている方もいて、ギリヤーク語をキリル文字ベースの正書法で読んだり、書いたりすることができた。ここで調査したギリヤーク語の文例は今後発表予定である。調査中、この村には電気が全くなく、蠟燭を用いていた。



写真7

この地域では夏は植物が生い茂るために陸路は使用できない。陸路があっても、かなり遠回りしなければならない。そのため交通手段はモーターボートである。冬は凍った河の上を車も走る。しかしモーターボートでの移動も、モーターが故障したり、スクリューに網が絡まるなどして、なかなかたいへんであった。最近ではガソリンの不足のため、行きはモーターボートで行ったが、帰りは5時間も漕いで帰ってきたという話をロシア人の研究者より聞いた。アクセスはなかなか容易ではない。トゥイルよりカリマとは逆方向へ行くとやはりペログリンカという村があってネギダルが若干名住んでいる。



写真8

この方々は非常に貴重なネギダルの話者である。人口が少ないため、夫婦ともにネギダルであるとか、日常生活でネギダル語を使用していないと、たとえ母語であっても流暢にことばが出てこないということがある。夫婦のうち一方がロシア人であっても、その言語の保持は非常に悪くなる。ただこの夫婦の場合、お2人ともネギダルで、しかもよく知っているのだが、おじいさんの方は歯が無くて、その不明瞭な発音を私は聞き取る事ができなかった。その後このおじいさんは亡くなったという知らせがあった。写真は1994年当時のものである。



写真9

この方はサマンジナというおばあさんで、モーターボートで行った上述のペログリンカという村に住んでいたおばあさんである。ロシアのネギダル語研究者、ペプノフ氏及びハサーノヴァ氏によれば、口承文芸のできる最後の話者であるということだ。民話もたくさん御存知だったが、この方も残念ながら近年亡くなられた。はじめて訪れた時、おばあさんはひどい二日酔いで、次の日もう一度モーターボートに乗って訪問しに行った。この時には90分テープ2本分近くも、貴重な民話や伝説を話して下さった。したがってこの方から1994年に録音させていただいた資料は極めて貴重である。その資料は1998年にマゴ村へ行った時に、そこでのコンサルタントの協力を得てやっと書き起こすことができた。2002年内に刊行の予定である。ネギダル語の口承文芸をはじめとするテキスト資料はこれまで1冊しか刊行されていない。文法記述も語彙集も現在のところごくわずかしかない。



写真10

次にオロチについてであるが、上述のようにオロチもネギダルと同様おそらく現在の話し手の数は100人前後の、危機に瀕した言語である。間宮海峡（ロシアではタタール海峡という）に注ぐトゥムニン河、及び間宮海峡に面した海岸地域に住んでいる。かつては海獣狩猟を行ない、それを生業としていた。左の写真がトゥムニン河である。トゥムニン河に注ぐ支流の河がいくつもあるが、オロチの人々の苗字は、それらの支流の河の名前に接尾辞をつけて作った構成になっているものが多い。トゥムニン河下流地帯へは、当時はハバロフスクより丸二日ぐらい汽車に乗っていかなければならなかった。現在はより直線距離で行ける道路が開通したということである。



写真11

この時の調査は1995年であったが、全く知り合いのいないところであったので、以前よりこの地域を研究してこられたウラジオストックの民族学者であるボドマスキ氏に同行をお願いし、便宜をはかっていただいた。当地ではイクラの大瓶を買い求め、二人で1週間近くこれを食べていた。



写真12

これは間宮海峡に面したオロチの住む村で、ダータ（もしくはダッタ）村である。写真に見える通り沿いにオロチがかたまって住んでいる。それ以外の場所は主にロシア人が住んでいる。かたまって住んでいると言っても、せいぜい10世帯ほどである。



写真13

話者は左の写真にみるような年代の方々であった。左のおばあさんは脳内出血で半身不随になってしまっていたので、体は半分動かない上に言語不明瞭であった。右のおばあさんより貴重な民話や語彙を録音させていただいた。

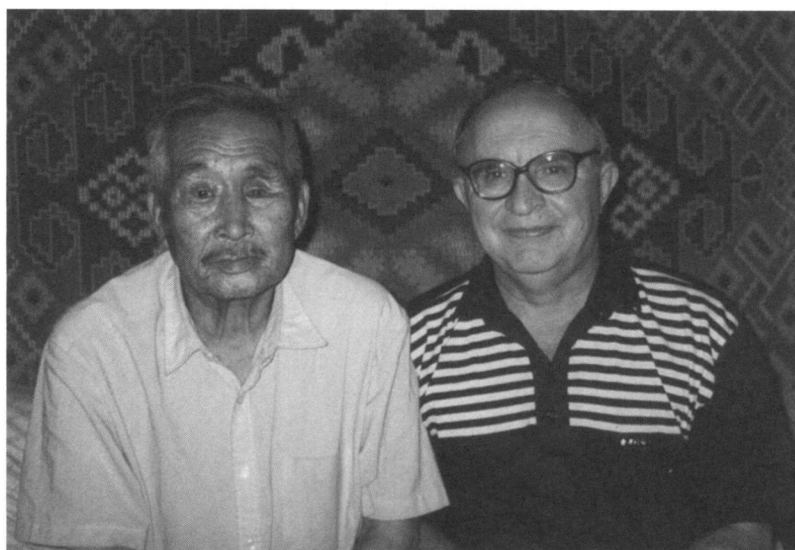


写真14

このおじいさんも（左）貴重なオロチ語の話者で、これはそのウスチ・オロチスカヤというトゥムニン河沿いの村にいらした話者である。この方は学校が嫌いであり学校に行かずに、山を歩き回っていたという。そのためかロシア語の強制的な教育を免れ、オロチ語をよく覚えておられた。

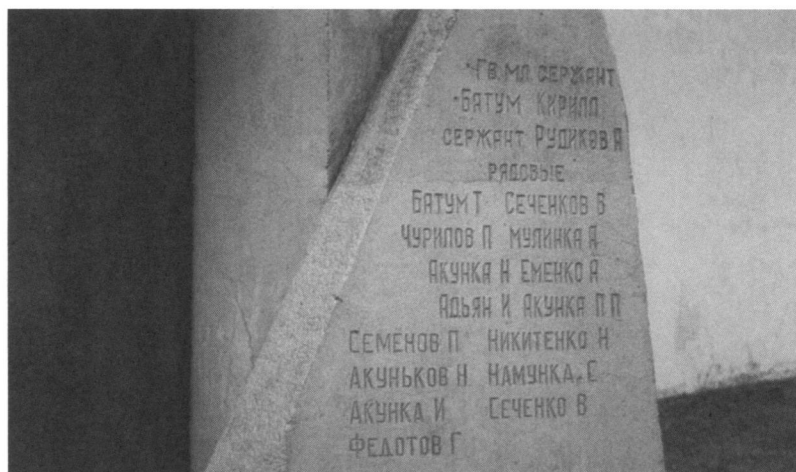


写真15

これはそのオロチの村、ウスチ・オロチスカヤにあった戦没者記念碑である。ここに記されているアクンカ、ヨミンカ、ナムンカなどの苗字は全部オロチの苗字であり、少数民族の多くが第二次大戦の際に最前線に送られ、戦争で多くの方が亡くなったことを示している。ただでさえ人口の少ない民族であるが、この時に若くて優秀な人を多く失ったことがわかる。



写真16

これは、和名でシシウドという植物で、オロチたちはこの根を薬草に使う。ナーナイもこれを薬草に使う。腹痛などに際し、この根を煎じて飲むが、傷に塗っても効くという。



写真17

これは和名でイソツツジという植物で、葉から良い香りを出す。この植物はシャーマニズムにおいてもっとも重要な植物で、シャーマンのカムラーニエを行なう時には必ず必要な植物である。シベリアには広く分布し、遠く北のエウエンでもやはりこの植物をシャーマニズムに用いる。



写真18

オロチの住む間宮海峡沿いのトゥムニン川河口には、サヴィエツカヤ・ガヴァニとワニンという大きな二つの港湾都市がある。毎夏にはワニンへ札幌新港から定期的に船が来ているそうである。こうした都市にもわずかながらオロチが住んでいる。



写真19

あるおばあさんがオロチ語をよく知っているという情報を得て、ワニンの街にその方を訪ねて行った。幸いお会いする事ができ、夕刻汽車に乗るまでの半日間調査をさせていただいた。驚いたことにこの方はながいこと、カザフスタンで教師としてロシア文学を教えていたという。そのためにもう30年ぐらいオロチ語を喋らなかったという。しかしその時私は、村で調査した後だったので、私にできる限りの範囲でオロチ語を使って話してみた。するとおばあさんは数時間の内にどんどん自分の言語を思い出し、民話まで語って下さった。そして汽車に乗るまでの間にそれをゆっくり言い直し、意味についてもロシア語で解説して下さいました。それでわずかな時間ではあったが、貴重な資料を得ることができた。たった数時間の出会いではあったが、忘れられない方である。



写真20

ウデヘはシホテアリン山中に住む狩猟民族である。先述のようにグヴァシュギ、クラスヌイ・ヤール、アグズ、アルセイニエヴァの4つの村に住んでいるが、左の写真はホル川沿いにあるグヴァシュギ村の風景である。



写真21

この村でシャーマニズムを見せていただいた。博物館ではないところで、仮面が実際に使われているのはここで初めて見た（その後も見ていない）。ナーナイの地域では男性のシャーマンにはまだ出会ったことがない（かつてはいたと言うが）。ソ連邦成立のときに殺された者も多かったと考えられる。



写真22

先述のように、アムール地域のツングースが用いる文様は多く渦巻き模様である。私見であるが、ウデヘによる刺繍はナーナイやオルチャのものより美しい。



写真23

これはクラスヌイ・ヤールというウデヘの別の村であるが、これもシホテアリン山中のピキン川という川沿いにある村である。

家など生活は基本的にロシア化しているが、蔵などは伝統的なものが若干残っているのを見ることができる。



写真24

クラスヌイ・ヤール村のウデへのコンサルタントの方々である。中央の方が民話や口承文芸の数少ない語り手であるが、近年亡くなられた。この方から貴重な資料をたくさん録音させていただいた。2002年に刊行の予定である。調査当時、ウデヘ語の先行研究は1936年に出版された、シュネイデル氏による文法兼語彙集が唯一のものであった。そのような状況の中、写真左のおばあさんが録音した資料をゆっくり言い直して下さったり、意味をロシア語で解説してくださったり、文法的な質問にも答えてくださったりした。残念ながらこの方も先日亡くなられた。



写真25

これは現地で実際に用いられていた揺りかごである。これをけっこうなスピードで揺らす。



写真26

以下はナーナイについてである。ナーナイ語は、発表者がもっとも長く研究している言語で、1990年からこの言語に取り組んでおり、ほぼ毎年現地調査にでかけている。左の写真の真ん中のおばあさんは口承文芸の語り手で、きわめてたくさんの民話や伝説を御存知である。発表者は現在までに8冊、約70話、合計で約1600ページほどのテキストをテープより書き起こし、発表してきたが、その大部分はこのおばあさんが語ったものである。他の語り手はほとんど亡くなられ、現在ではもっぱらこのおばあさんの語りを書き起こしている。彼女は1920年生まれで、2002年現在82歳である。知っている民話の数も膨大だが、中には長いものも多く、1話語り終えるのに90分テープが1本では足りないこともある。まだまだたくさんの民話や伝説を御存知のようなので、おばあさんが元気なうちに頑張ってさらに書き起こして行かねばならないと考えている。



写真27

このシャーマンのおばあさんとそのご主人のお2人から発表者は初めてナーナイ語を習った。しかし残念ながらお2人ともすでにお亡くなりになった。ナーナイ文語の基礎となったのはナイヒン村のナーナイ語で、ここはナーナイの中心地の一つである。人口約2000人の村で、ナーナイはその約半分、残りはロシア人である。発表者が初めて訪れた時、少なくとも3人のシャーマンがいたが、皆亡くなった。全員女性であった。

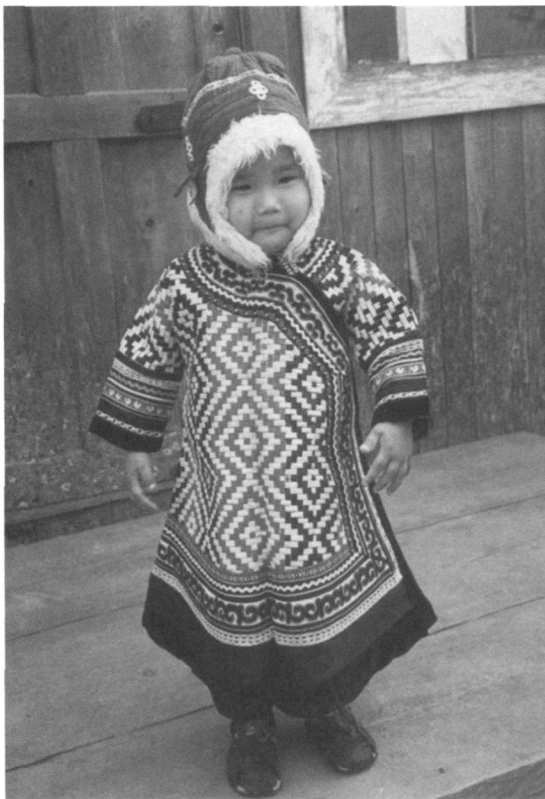


写真28

子供たちはナーナイ語を話すことも理解することもできない。学校では選択の外国語として教えられているが、フランス語を選択する子の方が多いという状況である。



写真29

ナーナイはアムール河中流域に住む漁労民であり、普段も魚を捕って暮らしているが、特に秋に遡上してくるサケの漁がその生活の中心を占めていると言っても過言ではない。捕ったサケは塩ザケにしたり、干物にしたりして冬を越す食糧とする。



写真30

魚は生でも食べる。いわゆる刺身であるが、細く切って食べるのでタタキのようである。ナーナイ語で「タラー」という。鯉、チョウザメなどをはじめいろいろな魚を生で食べる。半分凍らせて食べることもある。塩をかけて食べる。写真は魚をタラーにするために細く切っているところ。



写真31

ナーナイは魚皮で衣服や靴を作る民族として古くより知られてきた。現在ではしかしそのような衣服は用いられていない。写真31は博物館で撮影したものである。

発表当日には、いくつかの質問をいただいた。それについて記しておく。

Q: ツングースにおける即興的な歌とはどのようなものか？

一: メロディも即興的だが、我々が普通「歌」といっているものよりは、音の上がり下がりも少なく、お経を唸っているような感じである。つまりメロディというほどははっきりしたものがなく、同じ繰り返しが淡々と続いていくものが多いようである。

Q: 踊りはあるか、どのようなものか？

一: エウエンにはヘジェという名の踊りがあって、これは大勢が輪になってぐるぐる回って踊るものである。「ヘジェ、ヘジェ」という掛け声をかけて踊る。

Q: 歌の記録はあるか？

一: ノヴィコヴァという研究者がロシアではもっともよくエウエン語を研究してきたが、彼女も歌の研究、記録及び分析は非常に難しいと記している。そのため十分な記録はほとんどない。表現が難しい上に、個人的な事情や背景を聞かないと全然わからないのである。固有名詞も多く出てきてしまうので、一体誰がどこのどういう人物なのか、またそこでの人間関係がどのようなものであるかを知らないとな分析できないことが多いようだ。

Q: 人の歌を無断で他人が歌った場合に罰則はあるのか？

—: 罰則はあると思われるが、はっきり調査で確かめたわけではない。娘や姪などが、その歌を継承、相統することはあるようだ。その場合には歌うことを許可してそれを教えるということになる。

Q: 即興歌はどのような時にどのような目的で歌われるのか？

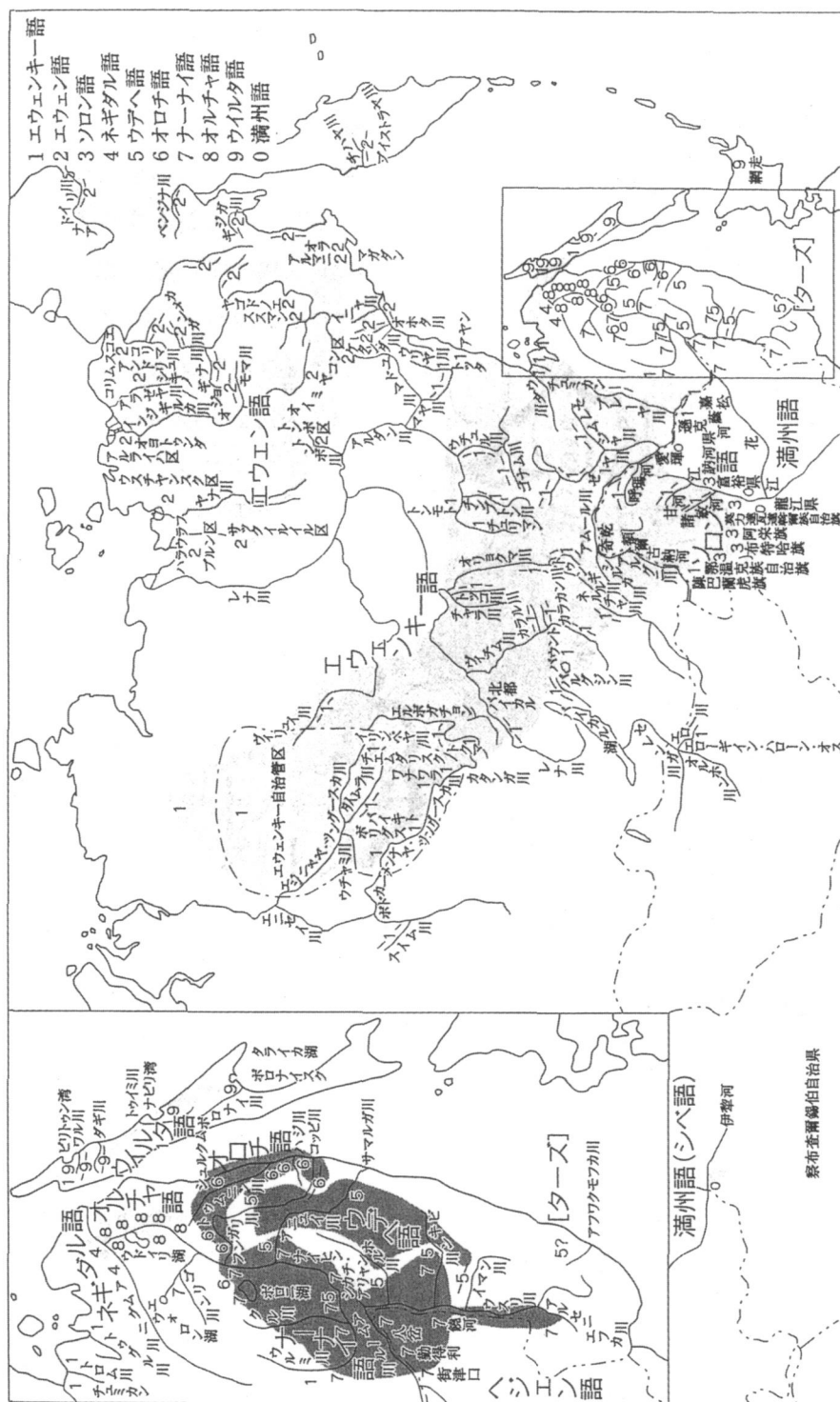
—: 元気を出したり、昔のことを思い出したり、つまりは自分のために歌われるもののようなのだ。自分自身で何か折に触れては歌うのだが、同じ村の者たちはそのことをよく知っているようだ。つまりどの人が歌うが、どの人は歌わない、とか、どの人がどんな歌を知っているか、歌えるか、などのことである。男性では狩りの話などを元にした歌になるようだが、まだ書き起こしに取り組んでいないので、詳しいことはまだ不明である。

Q: 物語にはどのようなジャンルがあるのか？

—: 名称は個々のツングースで異なるが、実話と考えられているもの、架空の話と考えられているもの、一定のリフレインを伴う英雄譚、子供用の小さな話、外来の話、などに分けられる。

Q: 物語の語り手は女性であるのか？

—: かつては男性の語り手も多くいたようである。テレビのない時代には民話等の語り最大の娯楽であったために、客人が来ると皆が知っている限りの民話を語り合うということがあったという。またすぐれた語り手には何日も続く長編を語る者もあったという。



地図 ツングース語の分布 (池上 1989: 1060 をもとに作成)
「ツングース語」 亀井・千野編『言語学大事典』第2巻所収, 三省堂。

ツングース言語文化論集

既刊目録

『ソロン語基本例文集』 朝克・津曲敏郎・風間伸次郎編

文部省科学研究費補助金（国際学術研究：63041002）研究成果報告書 北海道大学文学部，1991年3月。

『ツングース言語文化論集1』 黒田信一郎・津曲敏郎編

文部省科学研究費補助金（国際学術研究：63041002）研究成果報告書 北海道大学文学部，1991年12月。

『ナーナイの民族遊戯』（ツングース言語文化論集2）ボンサ K. キレ著／佐々木史郎・匹田剛・津曲敏郎編訳 小樽商科大学言語センター，1993年3月。

『朝克著「エウンキ語基礎語彙集」索引』（ツングース言語文化論集3） 津曲敏郎編，小樽商科大学言語センター，1993年6月。

『ナーナイ語テキスト』（ツングース言語文化論集4） 風間伸次郎採録・訳注，小樽商科大学言語センター，1993年7月。

『ナーナイの民話と伝説』（ツングース言語文化論集5） 風間伸次郎採録・訳注，小樽商科大学言語センター，1995年2月。

『鄂温克語三方言対照基礎語彙集』（ツングース言語文化論集6） 朝克採録・著，津曲敏郎編，小樽商科大学言語センター，1995年3月。

『オロチ語基礎資料』（ツングース言語文化論集7） 風間伸次郎採録・訳注，鳥取大学教育学部，1996年3月。

『ナーナイの民話と伝説2』（ツングース言語文化論集8） 風間伸次郎採録・訳注，鳥取大学教育学部，1996年3月。

『ウルチャ口承文芸原文集1』（ツングース言語文化論集9） 風間伸次郎採録・訳注，鳥取大学教育学部，1996年3月。

『ナーナイの民話と伝説3』（ツングース言語文化論集10） 風間伸次郎採録・訳注，東京外国語大学，1997年3月。

『中国ツングース諸語対照基礎語彙集』（ツングース言語文化論集11） 朝克採録・著 津曲敏郎補訂・編，小樽商科大学言語センター 1997年8月。

『ナーナイの民話と伝説4』（ツングース言語文化論集12） 風間伸次郎採録・訳注，千葉大学，1998年3月。

『Эвенские народные песни 〈エウエンの歌〉』（ツングース言語文化論集13）

Bokova, E. P. 著・Z. I. Babceva 露訳・A. B. Dorzheev 英訳・風間伸次郎編，東京外国語大学，2000年4月。

『ナーナイの民話と伝説5』（ツングース言語文化論集14） 風間伸次郎採録・訳注，東京外国語大学，2000年4月。

『ナーナイの民話と伝説6』（ツングース言語文化論集15） CD 8枚付 風間伸次郎採録・訳注，ELPR，2001年3月。

『増訂 ウイルタ口頭文芸原文集』（ツングース言語文化論集16） CD 1枚付 池上二良採録・訳注，ELPR，2002年。

『ウデヘ語自伝テキスト』（ツングース言語文化論集17） CD 1枚付 アレクサンドル・カンチュガ著，津曲敏郎編訳，ELPR，2002年。

- 『ナーナイの民話と伝説 7』（ツングース言語文化論集18） 風間伸次郎採録・訳注, ELPR, 2002年。
- 『ネギダール語テキストと文法概説』（ツングース言語文化論集19） 風間伸次郎採録・訳注, ELPR, 2002年。
- 『ウルチャ口承文芸原文集 2』（ツングース言語文化論集20） 風間伸次郎採録・訳注, ELPR, 2002年。
- 『ウデヘ語テキスト（仮題）』（ツングース言語文化論集21） 風間伸次郎採録・訳注, ELPR, 2002年。
- 『エウエンの民話と伝説（仮題）』（ツングース言語文化論集22） 風間伸次郎採録・訳注, ELPR, 2002年。
- 『ツングース諸語における基礎語彙 A（仮題）』（ツングース言語文化論集23） 風間伸次郎採録・訳注, ELPR, 2002年。
- 『ツングース基本例文集（仮題）』（ツングース言語文化論集 24） 風間伸次郎採録・訳注, ELPR, 2002年。

